

夕雲

小川未明

青空文庫

お庭にわの垣根かきねのところには、コスモスの花はなが、白しろ、うす紅べにいろ色と、いろいろに美うつくしく咲さいていました。赤あかとんぼが、止とまったり、飛とびたったりしています。お母かあさんは、たんすのひきだしにしまつてあつた、浅黄木綿あさぎもめんの大きおおなふろしきを出だして、さおにかけ、秋あきの日ひに干ほしていられました。ふろしきをひろげると、白しろく染そめぬいた紋もんが見みえました。

「お母かあさん、お母おおさん、大きおおなふろしきですね。」と、もも子こさんは、お縁え側かたわらで見みていて、いいました。

「もう三十年ねんも前まえになります。私わたしがお嫁よめにきたときに、おふとんを包つつんできたのですよ。昔むかしの木綿もめんですから、まじりがなくてじよ

うぶです。こんど、おまえがお嫁よめにいくときは、これにおふとんを包つつんであげますよ。」と、お母かあさんは、おつしやいました。

もも子こさんは、なんだかうれしいような、悲かなしいような気持きもちちがして、ぼんやりと日ひがほこほこと当あたる、布ぬのをながめていました。

よし子こさんや、かず子こさんのお母かあさんは、まだお若わかくて、髪かみの色いろも黒くろくていらつしやるのに、うちのお母かあさんは、どうして、もうこんなしらかに白髪がが多いおおのだろう。かず子こさんのお母かあさんも、染そめていらつしやるときいたけれど。

「お母かあさん、髪かみをお染そめにならないの。私わたし、お母かあさんの若わかくおなりなさるの、うれしいんですもの。」

「ええ、染めたいと思いますがお客さま
 があつて、汚い頭きたなあたまをしていて困りますから、もも子のお休みの日やす
 でもないと染められません。」と、お母さんは、いわれました。
 もも子さんは、明日は日曜日だから、お母さんが髪をお染め
 になればいい、そして、ごいっしよに散歩につれていっていただ
 こうと思ひました。

「明日、私、どこへもいかずに、お家にいるわ。」

「じゃ、明日ばかりは、染めましようね。」

日曜の日には、もも子さんが、きた人のお取り次ぎをしまし
 た。そして、午後のことでもあります。

「おかげで、さつぱりしました。もも子などは、これから大きく

なつて、世の中というものを知るのですけれど、お母さんのように年をとると、髪は白くなるし、肩は凝るし、目はかすんで、しかたがありません。きようは、よく家にいてくれました。さあ外へいって遊んでいらつしやい。」

「お母さん、こんど按摩さんに、もんでもらうといいわ。」

「きましたら、もんでもらいましうね。」

もも子さんは、外へ出て、お友だちと、お宮の鳥居のところまで遊んでいました。そばには大きないちよの樹があつて、このごろ吹く風に、黄色な葉が、さらさらと散つて、足もとは一面に敷いたようになつていました。

「こんどの日曜に、もも子さんくりを拾いにいかない。」

「どこかに、くりの木があつて。」

「すこし遠いけど、人の住んでいない荒れた屋敷で、大きなくりの木があるの。学校の帰りに、松野さんがつれていつてくれたのよ。」

「お化け屋敷でない。」

「ほ、ほ、ほ、そんなものではないわ。」

お友だちとこんな話をしていると、一人のみすぼらしいおばあさんが、鳥居のところ立ち止まって、神社に向かつて拝んでいました。片手に長いつえを持っていました。

「あ、按摩さんだわ。」と、もも子さんは、びっくりしました。

「お嬢さん、もう何時ごろですか。」と、盲目のおばあさんは、

遊あそんでいる女おんなの子こたちにならずねました。

「そう、何時なんじごろかしらん、もう三時じ過ぎたのでない。」

「ちようど、三時じごろよ。」

「ありがとうございます。」と、おばあさんは、いき過ぎすようと思いました。急きゆうに、もも子こさんはお母かあさんのおっしやつたことを思おもい出だして、

「おばあさん、うちのお母かあさんをもんであげてちようだい。」

「はい、はい、ありがとうございます。」

もも子こさんは、哀あわれなおばあさんを自分じぶんの家いえへつれていきました。そして、あとの話はなしは、そのとき、お母かあさんと、もも子こさんが、この按摩あんまさんからきいたものです。

「おばあさん、いくつぐらいから、お目が見えなくなつたのですか。」と、お母さんが、おたずねなされたのです。すると、按摩さんは、お母さんの体をもみながら、
 「ちようど、このお嬢さんぐらいの時分です。やはり秋の日のこ
 とでした……。」

外で、お友だちと遊んでいました。男の子がてんでに竹の棒を
 持っているのが、林のように、原っぱの空に突つ立っていました。
 頭の上の夕雲が、絵の具で描いたようにみごとでした。私は、
 それまであんな美しい夕空を見たことがありません。子供たちは、
 は、遊びに夢中になつて、家へ帰るのを忘れていました。私は、
 母親が、町の方へ歩いていく後ろ姿を見たので、みんなから別

れて飛んでいきました。母親のたもにつかまって、橋を渡り、坂道を上がって、お湯屋へまいりました。いつもいく、昔ふうの暗い湯屋でした。近所に旅籠屋があるので、いろいろの人がこの湯へ入りにきました。

このとき、借りた手ぬぐいがいけなかつたのか、帰ると目が痛み出しました。そして、とうとう盲目になつてしまいました。不思議なことは、いまでもあの最後の日に見た、美しい夕焼け雲の姿が、ありありと目に残っています。」

「まあ怖ろしい。手ぬぐいに毒がついていたのですね。」と、お母さんは、ため息をなさいました。

もも子さんは、またうらさびしい秋の日に、おばあさんからき

いたこの話^{はなし}が、いつまでも忘^{わす}れられないだろうと思^{おも}いました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「亀の子と人形」フタバ書院

1941（昭和16）年4月

※表題は底本では、「夕雲《ゆうぐも》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年9月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

夕雲

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>